

子宮頸がん予防 ワクチン

若い女性に発症する子宮頸がんの多くはヒトパピローマウイルスの感染が原因です。ワクチン接種を受けておくと感染予防し、結果として子宮頸がんの発生を少なくすることができます。

副作用について慎重に検討されましたが、大きな心配がないことが確認され、現在は積極的勧奨を行っています。



世界の
子どもに
ワクチンを

日本委員会

予防接種の注意・お願い

予防接種を安心して受けるために、いくつかのことを心がけてください。

- 受ける予防接種について、病気のことやワクチンの効果・副反応などについて、あらかじめ知ってほしいと思います。市町村からの文書や、育児書（雑誌）なども参考にしてください。分からないことなどがありましたら、会場の職員や医師にたずねてください。
- 健康状態の良い時に受けましょう。心配なときは無理せずに延期したり、医師に相談してください。
- 前日は入浴して、体を清潔に。
- 予診票は、良く読んで、きちんと記入しましょう。
- 母子手帳も忘れずに。（個別接種では、念のために保険証も）
- 接種の会場で、体温を測り、記入します。
- 予期できない重篤な副反応が、注射のあと15～30分以内におきることがあります。すぐに帰らず、しばらく会場で様子を見ててください。
- 接種の当日は、入浴をふくめていつもと同じ生活でいいのですが、激しい運動はさけてください。



子宮頸（けい）がんは女性のがんとして恐れられています。20～30代で急増し、日本では年間15,000人の女性が発症していると報告されています。子宮頸がんは初期の段階ではほとんど自覚症状がなく、定期的な健診を受けていないとその発見が遅れてしまいがちです。自覚症状がでてからでは、すでにがんが進展している可能性があります。

子宮頸がんの多くは、ヒトパピローマウイルス（HPV）による感染が原因です。このウイルスに感染しても、その大部分は自然に排除されますが、もし感染した状態が長く続くと、子宮頸がんを発症させることがあります。またこのヒトパピローマウイルスは特別な人だけが感染するのではなく、多くの女性の方が感染するありふれたウイルスです。

このヒトパピローマウイルスに対する複数のワクチンがすでに製造されています。海外の多くの国ではすでに導入されていて、12歳前後の女儿からの接種が推奨されています。日本でも法定接種として行われていて、小学6年～高校1年に相当する女性が対象です。

3回はすべて同じワクチンを使うことが必要で、途中で変更することはできません（効果が確かめられていません）。

日本でこの予防接種が始まってから、筋肉注射に慣れていなかったため、受ける時の緊張感が強く、それをきっかけに多彩な身体症状が発生することがあると報告されるようになりました。実際には身体的な関連はなく、心身症としてのケアを受けることで本人の訴えを軽減することができます。医学的に重篤な副作用とは考えられず、法定接種の枠組に変更はありません。厚労省からは令和4年度（2022年度）から再度、積極的な勧奨をすることになりました。

子宮頸がんの予防接種（シルガード、9価）

【法定接種】

- 小学6年～高校1年に相当する女性
- 3回の接種（初回接種ののち2か月後に2回目、6か月後に3回目の接種）
（初回接種が15歳未満では2回にすることができます。この場合は初回接種から6か月後に2回目の接種を受けてください）
- 筋肉内注射

予防接種を受けたあとの注意

※予防接種の副作用として、ごくまれに、注射の直後に急に具合の悪くなることもあります（アナフィラキシー・ショック）。万一のために15分程度は医院の中にいていただき、そのあともしばらくは医院にすぐひきかえせるようにしててください。（その場で適切な処置をすれば、最悪の事態はさけられます。）

子宮頸がん予防のワクチンは不活化してあるワクチンです。ほかの予防接種との間隔に制限はありません（新型コロナ予防接種を除く）。

子宮頸がん予防のワクチン

- ①注射したところは軽くおさえていて下さい。また接種後は立ちくらみなどに注意しながら、院内でイスに座って静かにしてして下さい。
- ②丸一日は激しい運動は避け、普通の生活をして下さい（**入浴はかまいません**）。
- ③接種したあと、当日や翌日などに熱をだすことがときがありますが、ほとんどはそのままでおさまります。
- ④注射したところが、赤くなったり、はれたりすることがありますが、そのまま数日でおさまります。